

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和元年十二月二十八日印刷納本

昭和二年一月一日發行 (月刊)



第六十八號

札幌 山とスキーの會 發行

次 目 號 八 十 六 第



記 事

スキージヤムビング用スキーの研究

再び高山疾病に就て

スキー滑走に於ける二要素に就て

スキーのワックス

直滑降の味ひ

老 婆 心

完成近きサツボロシヤンツエ

彙 報 抄 録

廣 田 戸 七 郎

本 田 治 吉

岡 村 源 太 郎

麻 生 武 治

な ほ み つ 生

T O S 生

廣 田 生

〔一〕

〔一三〕

〔二〇〕

〔二六〕

〔二八〕

〔三三〕

〔三四〕

寫 眞 版

Einsterhorn hütte に於かせられる秩父宮殿下 Arnold Lam.

海外に雄飛する麻生君

C. J. Luther.

天皇崩御遊ばさる。

嗚呼悲しい哉。

謹而哀悼の意を表し奉る。

蕭而寒幹の意が甚し奉る。

御初燕しつ錯。

天皇御時燕しつる。



Finsteraarhorn Hütte におかせられる秩父宮殿下

Arnold Länn.

スキージヤムピング用スキーの研究

廣 田 戸 七 郎

スキーといふものは、よしんばそれがゲレンデで用ひらるゝものにせよ、純スポーツ的な目的の爲に使用せらるゝものにせよ、將又それが單なる登山のミツテルとして用ひらるゝものにせよ。何れの場合何れの立場から見ても重要に考へられねばならぬものであらう。スポーツに用ふるが故に非常に吟味せられねばならぬとか、單なる登山の際の一つの用具に過ぎないのだから、粗雑でも良いといふことは無い筈である。

斯角何れの場合にもスキーは、よく吟味せられ、調製せられたものでなくてはならない筈である。

シユナイデル氏ではないが、實際お互の考へてる様に、心ゆくばかり満足出来る様なスキーといふものはなく、手に入れることは至難なことである。だが然し何時の場合にも篤と吟味する必要のあることは今更言ふまでもないことである。私は今此處にジヤムピング、純スポーツ的立場にあつて純競技的に使用するジヤムピングのスキーのことについて述べやうとして居る。然し夫れ故に全部が全部普通のスキーの選擇乃至は吟味のことから遠ざかつて居るといふ譯でもない。

私の述べて行く處に幾分でも普通のスキーの吟味、決定にまであづかる處が見出さるゝならば、尙筆者は幸に思ふ。スキー術が盛んになつて来て、凡べての技術が純スポーツ的になつて行き、スポーツ専門にやる人達が多くなればなる程スキーの吟味、決定が六ヶ敷くなる。單にそれはスポーツに用ふるスキーのみに止らず、普通のスキーの選擇、吟味、

決定にまでも影響して行くことは今更喋言を要せぬ筈である。

材について先づ私はヂ・シユナイデル氏の言ふ處を記して見る。

材は種々の雪質に對して一様に良く滑り、常に適當な速度を保たねばならない。然し乍ら登行に當つて後滑りをして登つて行けぬといふのもいけない。

此處では、吾々は互の個性や科學的考察に基づいて最も適したる材を、求むる必要がある。そして亦競走の種類、斜面や雪質の關係に最も良く一致して居るものを求めねばならない。

材質について

良きスキーを作る爲には、良き材質を必要とする。

乾燥の十分なるもの。

粘性に富むもの。

抵抗力あるもの。

強性あるもの。

撓め易きもの。

撓曲によつて原型を失はないもの。

容易に吸水せぬもの。

緻密な木目をもつもの。

平滑にして堅き面を有するもの。

腹臈なく云ふならば、この本性を有するものは、たと二種しかない。即ち次のものである。

アメリカ産のヒツコリー Americanischen Hickory.

エツシエ材 (歐洲産に限る) Eschenholz (Nur Europa)

この内ヒツコリーが最上である。

エツシエ材は今から六、七年前までは最上のものと考へられて居たものであるが、遂に最近のスキー熱の隆盛と、研究の發達から、アメリカヒツコリーに壓倒せられるやうになつたが、でもシュナイデル氏によれば、此材はヒツコリーには劣るけれども、現在のヒツコリーに代用し得るものは、たゞ一つ此エツシエ材のみであると言つて居る。

私は以下暫く此二種の材についてシュナイデル氏の述ぶる處を傳へやう。

アメリカ産のヒツコリーについて

これは最も重き堅硬なる材種の一つである。この材の緻密なる木目は、最も吸水し難いものであり、表面は鋼鐵を含むが如く、専門的に加工すれば鏡面の如き滑かさを持たすことが出来、之によつて大速度を得らる。唯一の長所とする性質は、如何なる種類の雪質にも、如何なる雪質の變化にも緻密な木目は、無關心である。尙この材は速に摩滅せず、抵抗力を有し、極く稀に折損するに過ぎない。そして數年間その形、彈性を失ふことはない。尙その上ジャムブ用スキーに適すといふ利益がある。

その重いこと。

鏡面の如くその表面を滑かに磨き得ること。

速度を出し得ること。

而して適當な良きシャランツエに於ては、同じ年齢の同量のエツシエ材のスキーを使用して、飛行した場合よりも、ヒツコリー材のスキーを使用する時には、數米遠方への飛行を證明することが出来る。

實際四〇—六〇米の大飛行に於ては、たゞヒツコリー材のスキーによつてのみ達せらるゝものである。その理由とするところは、この材の抵抗力の信頼するに足るこゝである。

Fischenloiz のジャムプ用スキーは、唯初心者で使用せられるに過ぎない。熟練者は精々飛行距離が三〇米以下にある時に、短距離飛行に當つて之を用ふべきである。

競走の際の、ヒツコリー材の主要なる利益とするところは、その速度のあることである。特に軟き、不整の斜面の場合に有効であつて、遙でに軟弱な材で作つたものを凌駕する。恐らく此利益は、平滑なる斜面に於て特に三段滑走をする時に、吾々は最小の力の消費を以てして、むしろ比較的速かに前方に進み得られ、そして滑走距離を延ばし得る點にあらう。之に反しエツシエ材には、地面につかへ大きな摩擦を生ずる不利な點がある。

ノールウエーの文献にも斯ふゆうことが書いてある。

「ジャムプ用スキーとしてはヒツコリーが最も適當なものである。その重いこと強靱なこと、弾性の余りないこと、硬質なこと滑りのよいことなどはその特長とするところである。」

所謂日本で云ふヒツコリーとは純粹のアメリカ産のヒツコリーとは大いに趣を異にして居るものである。或専門家に云はずと日本のクルミをヒツコリーと考へて居るのはどうか疑問であると言つて居る。(筆者)

次に尙シユナイデル氏がエツシエ材について述ぶるところを探究して見る。

エツシエ材について

一定度までは此材も亦、充分に相當なものであり得る。

ヒツコリー程には堅硬ではない。

又ヒツコリー程には重くない。

速度も亦ヒツコリー程には達せられない。

水には抵抗が弱い爲めに、ヒツコリーに比して雪質變化に對して鋭敏である。

ヒツコリーよりも軽いといふことは、競走には無意味のことではあるが、比較的重いといふ點でジャムブ用スキーとして、使用せらるる利益がある。

スキー旅行用としては好適である。即ちその軽い重量は、登山の目的として全く適して居る。

特に競走の目的には、ヒツコリーが適し、初心者及び、登山乃至は旅行の目的にはエツシエ材が適して居る。

夫れ故、吾々は良くエツシエ材も亦、その緻密な木目のものを選んだならば、(ヒツコリーの如く) 一層宜しいであらうと考へるけれども、事實は全く反對である。夫れ故吾々はエツシエ材に限り常に廣い年輪のものを用ひる。

廣き年輪を有するものは、堅硬であり、左程早く木目が研ぎ出ない。

最も良くエツシエ材は、平地に生長せる *Amsden* (濕地又は草地に生ずるエツシエの意ならん) で、次いで *Waldesehen* (山林に生ずるエツシエの意ならん) 山林に生ずるエツシエは、夏季非常に伸びるので宜しくない。

エツシエ材は特に幹の下部が宜しい。

其他の材について

他の材種には、堅材として樺、山毛櫸、針槐がある。是等は軟材よりはましではあるが、山毛櫸は吸水が非常に速かである。針槐は先づ是等の内で第一等である。けれども結節の多いこまが欠點で、その爲に反り返りが早い。之は加工には便利であらうがその代り形が急に失はれる。

北歐の人達は好んで山地の樺を使用して居る。これは軽く弾力がある。が然し非常に水分を吸収し易く、且つ折れ易いと述べて居る。

此點から考へて北海道方面に産するイタヤは多量にあること及び先年平井左門氏の實驗の結果からして見ても割合に好い材の部にある。即ちスキー材として適當するものであることからして吾々は是の出来るだけ良質の材が選擇し得らるるならば大へん良いと思ふ。然しコブのあるイタヤは針槐の様に余り感心出来ないものである。

櫻材のことについては、殆んど何もシユナイデル氏は記述して居らないが、吾々は平井氏の實驗をさぐつて少しく述べて見たいと思ふ。

平井氏の實驗例は無論ジャムブやデイスタンスレースに使用したといふ譯ではなく僅か一九〇米程の斜面を滑走して見るとの結果であつて、一概には言はれないが、兎も角サクラ材が割合にイタヤ材と近似なる性質と結果とを表はして居ると云ふ點に於て、決して棄てらるべきものでないやうであるが、吾々の實驗した點から述ぶるならば、櫻材は普通用のスキー又はデイスタンスレース用には有効であるかと思はれる。

取材と加工について

材の取り方にも種々あらうが、最も良いとせられて居るのは邊材をとることである。即ち邊材のみをとれば板目を得ることが出来る。板目の方が柾目よりも遙かに良いことは已に周知の事柄である。

材は秋期に伐材すべきであることは之も周知のことであらう。更に普通のスキーでもさうではあるが、伐材したものを人工的に乾燥してはいけないし、又少くとも一年は自然乾燥をして適當に處置せられたものでなければいけないと云ふことは私共が、已に幾度も經驗した處である。殊にジャムブスキーに此二條件を絶對的に必要とすることを力説したい。

尙ノールウエー地方で、普通のスキー材の取材の方法を如何にして居るか、そして取材したものを如何に加工して居るかの順序について述べて見やう。

取材の方法は大體挿入圖の様にして線を入れて切つて行くもののやうである。

圖は一つのアツシユ材に型を當て、截斷線を入れた斷面圖である。此方法でやつて斷ち切つた板に歪みが出ないならば理想的であらうが、狂ひの出るといふことがスキー製造者を泣かしむるものであらう。

まづ右の様にして取材したものを次に加工して行く順序はどうして居るかといふに次の五階段をとつて居るやうである。

一、材木を板にする爲に大きき約三、五種（恐らく厚さであらう）位に切る。巾のことは別に記してないが大凡そ七、五種以内のやうである。

二、切つたスキー斷面板に仕上げのスキーの郭線を引いてスキーの形を作る。

三、次にスキー材を削つて行き、そして曲げるまでの加工をする。

四、材料を曲げる爲に縮金に當てて縮める。

五、仕上げ。スキーに必要な一定の顯色を施す、絶對的の仕事をする。即ち溝を掘り、塗工をする（ラック、ニス等）荒く之を擦つたり、タールを塗り込んだりする。

大体之が普通用のスキーの仕上げまでの順序の様に、ノールウエーの K. V. Amundsen 氏著 *Ski-jumping* に記してあつたものである。

更に私共の研究せんとしつゝあるジャムプ用スキーについて大体こんなことが記してあるかを、もう少し該書によつて探究して見やう。

ジャムプスキーはジャムピングヒルの大きさによつて、又飛行距離の困難さ、及び該技の難易に従つて、ジャムバアは普通のスキーよりも、より堅硬な、より頑丈なスキーを持つであらう。そして彼等は劇しい飛躍の後の強い着陸の抵抗に對して耐へ得るスキーを持つであらう。持たねばならない。

ジャムプスキーは勿論普通のスキーより長く、より巾廣く、より重いものである。

長さ 235—241cm. 中央の巾は約 8cm. 目方は變りはあるが約 6—7kg (兩方合せて) (Yokano 蠟雪の時にはジャムバアは兩スキーの目方 6.5kg の目方を適當として居る) ジャムプスキーの強度はジャムバアの体重を直接に受ける中央部に特に置かれねばならない、スキーの前後は、左程材を頑固にしてはいけない。若しも特に前部が軟かであるとか又はスキーの先端の關係で良くへコマねはならないベンドに於て、材が幾分曲るならば、その結果、スキーは反りそしてジャムバアは彈力的に立ち上る。たとへ穴の角のすぐ前で大へん危く着陸したであらうとも。それ故にベンドの部分に余り多く肉をつけてはいけない。

吾々は餘りに頑固に、厚過ぎるジャムプスキーに對してスピードを高めることなく、むしろしばしばスキーが斜面の雪を砥^ひるやうになるのを見るこゝが出来る。多くのスキーの曲りの形は醜く、そして不必要の巾を持つて居る。

舵の役を爲す爲に二本—三本の溝をジャムプスキーには必要である。これは長距離飛躍の後に危かしく着陸した時、又はカンカンに堅い雪のところに着陸した時に大へん役に立つものである。舵の動きは横滑りを助け又確實な着陸を與へる。ジャムプスキーの緊張は材に關係するが上下に略々二種位曲るものである。

以上が大体の Ski-Tipping の中のジャムプスキーについて簡單に記してある一文である。

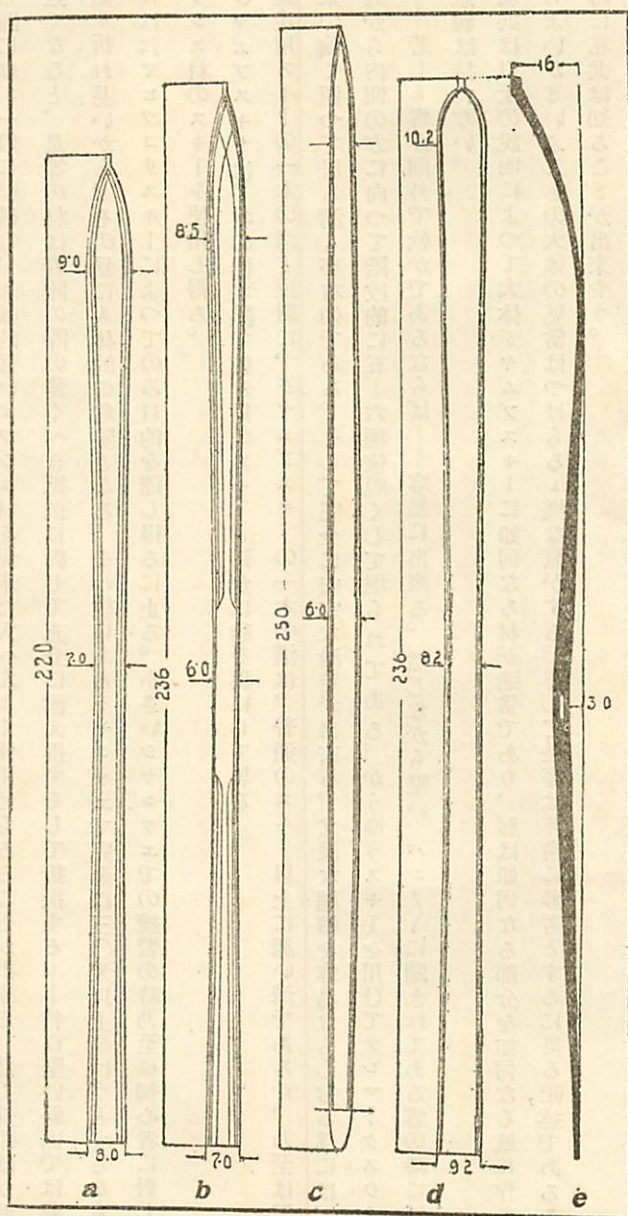
更に私はシュナイデル氏が、ジャムプスキーのことに尙記して居る處を述べて行つて見たいと思ふ。

現今のジャムプスキーは本當に怪物の様な感じがする。

形をそして特に重量即ちジャムプスキーの強さと關係して飛躍は次第に實際的に變つて行つて居る。五〇—六〇米の飛躍には強い、重い、凡てが耐へ得る材を必要として居る。數年前まではヒツコリー材から出來て居る一對のジャムプスキーの重量は四—五疋の程度であつたものが、現今ではジャムプスキーの重量は、平均六—七疋になつて居る。七〇米に近い飛行をして居るアメリカ人の使用したスキーは八—一〇疋にさへなつて居る。

是に對して此間にジャムプスキーの形は、本質的に變つて來た。即ち挿入圖を見る如く先部がシャベルの形の様に廣く

一般に使用せられて居るスキーの型。左のものは長さ120の種、テレマークスキー（巾8.7、9、種、特に直滑降に適す）第二番目比較の狭い長さ110の種（締具の下部の巾6種）の長距離競走スキー。C圖のスキーは中央部の巾の廣いそして丈の長いフィンランド式長距離競走用スキーである。之はアルペン地方では何等意味をなさない。第四番目のものは模範的な長さ120の種で適当な巾を持つジヤムプ用スキーで尖端部はシャベル型に廣くなつて居る。最後のものは此ジヤムプ用スキーの側面圖である。よく釣合のとれて居る模範的の尖端部の曲りは特によく觀察し得る。



されて来た。そしてその強さは多少増された。飛距離に關係して廣くなつた譯である。

ジャムプスキーの形はテレマークの型で、そして、縮具の本で八一八・五種前部が一〇一一種、後部が九一九・五種の廣さである。されど尙廣いものもある。

更に重さは材の巾を廣くするよりも、むしろ強さを大きくすることによつて高められるものである。二八一三二米までの飛躍には、一般に堅硬な、比較的強いエツシエ材を尙未だ大へんよく使用せらるることが出来る。然し飛距離が四〇米に近くなると、是等の材は着陸の際の驚くべき抵抗に對して充分に耐え得ずそして折損する——特に堅い斜面では非常に容易く折れ易いから、その爲に人体的の危険となる。それ故にあるシャンツェで完全に三〇米以上飛ばうとするならば、吾々はたゞヒツコリスキーによつてのみ目的を達し得るに止る。小さいシャンツェでの練習の時乃至は初心者に對してはエツシエ材のスキーを使用し得る。

ジャムプスキーは、次の様な點で競走用のスキーと遙かに趣を異にして居る。

競走用スキーの一本の溝と反對に、ジャムプスキーの一本の溝は、普通のスキー以上に深い溝であるか、乃至は二本、三本の狭く通つて居る溝も亦有効である。そして完全に安定な滑走が出来る。立派な廻轉を容易ならしむる爲には、此溝を外から内側の方に向つて階段的に五―六種位短くして堀られてある。かうゆうスキーを用ひてテレマークスウィングが——若しも雪が圏外で軟かであるならば——容易に出来る。然しながら堅い、バン／＼に踏まれてある雪の時には特別の意義は持たない。

私共は以上の説明によつて大体ジャムプスキーに如何なる材が適當であり、形は如何なる部分を如何なる風に作り上げたらよいかといふことの大体の見當はつけらるゝ様な氣がする。そして是等は非常に参考とするに足る記述であることを同時に私共は知るこゝが出来やう。

最後に、私共は以上の Schneider 氏及び K. V. Amundsen 氏の説く處によつて大体外國に於てのジャムプスキーの大凡その形を知ることが出來た。而も是は同國人の体格と、身長を起準にして居るものであることは勿論であらうと思ふ。

されば此處に吾々は、吾々日本人の体格に適當して居るであらうジャムプスキーの形、及びその性質等に關して如何なる程度のものが適當であらうかを一考する必要がある。而も外人の体格、中歐人と北歐人とをして南歐人ととの体格や身長等についての規準を何の位にして考へて居るものであらうかは、明瞭ではないから、確と吾々に適すジャムプスキーの長さが斯う、巾が斯う、重さが斯うであるべきだと斷定は出來ないが、大凡その見當はつくかと考へられる。

上述の外人の寸法から行くと大体の長さは二三六一—二四一糎までの間といふことになつて居るやうである。

此處でジャムバアの身長とスキーの長さとの割合を何の位の見當に見たら宜しからうか。外人の寸法から云ふと今假りに身長を約一七〇糎として其人が二三六糎のスキーを使用すると考へると、身長と使用スキーとの長さの開きが六六糎なる譯である。尙又約一八一糎の人が二四一糎のスキーを使用すると考へて六〇糎の長さの開きを有するものを使用して居ることになる。此處で先づスキーの長さとの長さの開きは六五糎の内外をシユワケンする程度でないかと考へられる。尙外國で二四一糎のジャムプスキーを穿く人といふのは、餘程背の高い人が使用するものであるといふ様なことを嘗て私は或書で讀んだことがあるから、先づ七〇糎の開きは殆んど見られないんぢやないかと考へられる。此程度から推して私共は約一六六糎の人なら二二七糎位のスキーを使用したなら良いかと考へられる。勿論次に來る体重とスキーの重さとの關係を考慮せねばならぬことになるけれど、先づ外國でジャムプスキーの重さは六一七疋さいふ見當からして五—六疋位の間に適當したものが得られやせぬかと考へられる。

尤もスキーの形の方は個人の身長や体重を左程重要視なくとも大体見當はつけられるが、スキーの長さ、重さといった様なものは使用する人の個人々々によつて、左右せらるゝところが多いものがあるから、是は今後の多くの人達の研究と經驗に俟つところが少くない。

スキーの中のことについて普通のスキーでもジャムブ用のスキーでも競走用のスキーでも、大体前部、中央部、後部の比率が6:1:8の關係にあることは、シュナイデル氏が述べて居る處であるが、此關係は外國での大体の規準のやうであるが、此關係もたしかに吾々が今後大いに研究して見る價値ある事柄であると思ふ。

尙ジャムブスキーの加工に留意して然るべき一つの事柄は前述せる「ジャムブスキーの緊張の屈曲度が約二種位」といふ事柄であると思ふ。即ち是によつて中央部の曲げ工合、肉のつけ方等が考究されて行くかと思はれる。

最後に飛躍の距離延長と材質の問題であるが、四〇米以上飛ぶ爲には、どうも所謂アメリカニツシエ、ヒツコリーでなくちやいけないやうであるが、轉倒を度外視して、吾等は吾等の有する内國産のスキー材によつて成功することが出来ないであらうか。吾等は此點について尙一層理論的、實際的から、ジャムブスキーについて研究する餘地を持つて居るのではあるまいか。

日本の現在の著名なスキー製作者は、可成此方面に意を注いで居らるゝ様で誠に結構なことであるが、大部分は可成り損のない様にと云つた様な工合に作つて居らるゝ様であるが、もつと献身的に此方面に力を入れて居られる私共のよく知つて居るスキー店の様な工合に全國のスキー製作者が研究的にやつて下さらんことを希ふものである。

附 記

本稿は私が北大スキー部記念出版の末端にても載せて頂ければと思つて、此春書き連れて見たものであります。幸ひ本誌に掲載願へたことを感謝致します。(十二・十八)



海外に雄飛する麻生君

C. J. Luthier.

再び高山疾病に就て

本 田 治 吉

一般には只高山病とか、山岳病とかと一口に云はれて居るけれど、之を嚴密に分類したら單なる山岳病としてだけでは満足出来ぬ所がある。自分はこの高山疾病を分類して、(否却つて之に附加して云つた方が良いかも知れぬ) 次の様に分けて見たいと考へて居る。

従つて其の原因も一般には、單に空氣の稀薄と酸素の缺乏とによると云ふ風に考へられて居るけれど、次の様に高山疾病を細かに分類して見ると其の原因も亦種々ある様に考へられるのである。今之を分類して見ると、

一、所謂高山疾病 (Sogenannte Bergkrankheit)

一、グレッツチャー疾病 (Gletscher Krankheit)

(附)三、日射病 (時に紫外線日射病) (Sonnenschlag, bez. Ultravioletstrahlenschlag)

の如く分けられる様に考へる。日射病は平地にも見られるから、特に高山疾病の中に入れて良いかどうか分らぬが、特に紫外線を多く含む光線的作用を意味して附隨的に入れておけばよからう。

所謂高山疾病

勿論之の所謂高山病なるものが、代表的なものである。(之の高山病 Bergkrankheit なる名は、ずっと以前1590スベ

ン人のヂエスイット宗徒なる *Acosta* がペルーに於て、4500 m の高所で呼吸困難、引いて嘔吐、吐瀉、吐血を引起した事に初り、其後同じくスペイン人軍人 *Ulloa* が同じくペルーで経験して "*Mareo de la puma*," と名づけた。次で *pacard* 等がモンブランで研究した結果命名された名である。)

原因 即ち衆知の如く登行による高度に基く空氣の稀薄と酸素の缺乏が最大なもので、之に次で身体の勞動(緊張)が大きな理由となるのである。即ち、(1)空氣の稀薄によつて、身体を構成する各細胞間相互の、及び外界に對する壓力調節平均に高調を來たす爲め、(2)酸素の欠乏により(勿論個人的強弱差異はある)造血系、循環系、呼吸系、代謝機能に變調を及すため、(3)身心の過勞と不斷の緊張によりエネルギー供給の調節に變化を見る爲めであらうと思はれる。

學者の説によれば、尙之の他に高山に於ける空氣の電氣的性質(即ち單極導電、及びイオン化説)或は地殻のラヂウム放射機能等に原因を求めて居る向きもある。

症狀 一般症狀としては、全身疲勞、根氣抜け(精神的及び身体的)空氣饑飢狀態、壓迫感、思考力減退、食慾不振、眩暈等である。之を各部器關系に於ける症狀を見れば、

(一)呼吸系 主症は呼吸困難であらう。其他一時的肺氣腫氣管枝擴張、肺出血等をも見る事がある。之の症狀は而て登高の速度と身体の運動の強度に比例して、激甚且つ早期に現れて來る。普通 1900ft を境として來るらしい。

呼吸困難の原因を、或る人は風速に、或る人は風重に原因を求めて居るが、一言にして云へば、酸素欠乏と心身不斷の緊張に依ると云ひ得ると思ふ。

(二)血管系 主症は心悸亢進と貧血及び出血であらう。之も矢張 1900ft を境として急激に變化して來る様である。貧血による顔面及口唇の蒼白、四肢先端部の冷却が其の症狀として見らるゝ理である。而も一度冷却すると之を回復するに實に困難なものである。そして一寸した身体の運動でも之の症狀が甚しくなつて來る。

然るに普通〇。欠乏を告げると、短時間中に血球の數、血色素は非常に増して來る。之は水分不足より來るものであら

う。其他即ち出血（口唇出血、結膜出血及鼻血）が多く見られる。

(三) 筋肉系 筋力の非常に減弱する様に考へる。

(四) 消化系 先に述べた如く食欲不振、嗜好の變化、便通、排尿の減少等が主症であらう。一般に嗜好は水分を多く要求し甘味物を多く要求する様に思はれる。其他人に依つて嘔吐、悪心、下痢等を來す事がある。

(五) 神經系 即ち視力、聽力、嗅覺、味覺等に變化が來る。其他頭痛を訴へたり、不眠症となり、或は記憶力、思考力の減退を實際に於て證明されて居る。而も最も著明なのは意志が鈍重となる事である。

經過 然し之の疾病も、不幸な轉機をとるものは至つて少く、次第に之に馴れて來るものであつて、又之の症狀は下山すれば立所に快復するのが普通である。然し其の高所に居ても次第には之に馴化するものである。現にチベット地方に住む人達は其の地方の高度に可なり馴れて居て、他の地方の登山者等に比し斯かる疾病の度が少いのである。

高山疾病の境介線、即ち之等の疾病は何れ位の高さから起り得るか、換言すれば何の位の標高までは之の疾病に胃されずすむか？と云へば、醫學上から見ては一般に前述の如く 5000 呎を以て介とされて居る。然し之も一般的平均數にして、勿論各個人々々に依つて程度が異なる。而て又其の登高の速度にも大に關係し、而て又各器官に依つて胃され方が異なるものである。試みに各臟器諸系の疾病を來す標高をしらべて見ると次の如くである。

一、呼吸器系	14000 呎——19000 呎
二、血管系	16000 呎——19000 呎
三、筋系	19000 呎——21000 呎
四、消化系	21000 呎——23000 呎
五、神經系	21000 呎——23000 呎

之に依つて見ると、呼吸器系及び血管系が最も早く胃され、消化系、神經系（精神系）が一番遅い理である。

然し之も單に數字の上の統計でのみ却々は出來ぬものである。各個人に依つて大差ある事は否定出來ない。殊に精神系方面に於ては、其の人の努力如何によつて、斯かる高度に於ての 2000 呎位までは左右出來ると云ふ事である。

ゲレツチャー病

之の特長は高山よりも、即ちゲレツチャー中に於ける特有なものなる事、而も之の發現には必ず氷河の存在を必要とする事である。

症状 其の主症は、エネルギー消耗時に運動に對する嫌惡、四肢の衰弱、筋力減退、發汗、虚脱等である。

實に甚しく強度になると、虚脱の状態となるものである。之の強度の場合を形容して「雨中濕潤なる沼澤地を渡渉する感あり」と云つて居る。其の重苦しい、何とも名狀出來ぬ壓迫感は實に堪へられぬと云つて居る。

原因 之の症状の原因は、氷床、太陽の強射、及び無風による大氣の重壓的密度の三ファクターに關係して居るものである。之の三つの要素のコムビネーションに依つて、即ち太陽の強射によつて氷床の表面の氷はとけて蒸發する。従つて大氣の湿度は非常に高度となり、飽和状態となる。其の密度は昇る。而てゲレツチャー中の事にて、多くは風は比較的妨げられて居る。殊に無風状態の時は強く、其の重い空氣は一定の所に滯澁して居る。其の上に氷面と接觸して居る爲めに上昇せぬ。之のアトモスフェアの重壓が原因となるものである。之が氷河を伴ふ必要のある理由の一つである。

従つて之の症状も、其の時の大氣のコンデションと天候によつて非常に左右されるものである。即ち無風、太陽の強直射（日中）にて氷河上にある時は實に強度に發來する。反對に夕方、早朝、曇天、又は清澄な時は軽度にて、殊に氷河上を過ぎて岩石、或は堆石上に到れば快救されること云ふ。

高山疾病に對する豫防

ある原書によるミ、所謂アルペンウングルエックスワル（不幸）は、實にクリーマに對する順應作用と、筋勞動の反應作用の不充分に基きて、實に危険な位置にあつて高度の身体緊張の間に、突然血液の循環作用が不全となる爲めであつて、其の場合すでに何とも手の下し様がないものである」と云ふ様な事を云つてある。

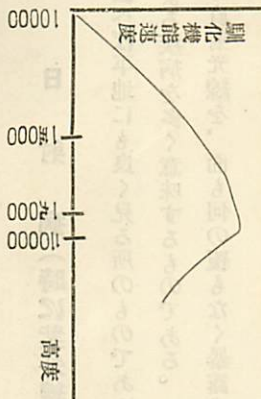
即ち之等高山疾病にも之の言が適用され得るミ考へられる。従つて之が豫防も一言にして云へば「馴化」そのものであるミ云つて過言ではない。

即ち登行を遂行する場合に各高度に對して、各々順應する様に努力し乍ら、極めて徐々に登高を爲すに限る。

次には、斯る高所に於ける動作の練磨である。

試みにエベレスト登行の際の例を借りれば、極めて徐々に登行をつゞけた時ミ、少しく速度を早めた時の苦しみの差、故障者の數の多少を比較して、如何に後者に多きかを知る。尙又第一回、第二回と回を重ねて其の行に加つた人は、初回の人よりも反應少く、体力強壯であつた事も之の理由の裏書を爲すものであらう。

然し之の馴化も一程度までミ、其の高度を越せば可なり急速に減退するものである。其の最高を20000とされて居る次のカーブは之を示すものである。



其他酸素供給、各自努力も之の要素として重要視されねばならない。

以下の二つは附屬的の意味に書くものである。

日 射 病 (時に紫外線病)

單に日射病と云へば平地にも良く見る所のものである。此處に云ふ日射病はより多く高山に於て見る紫外線を多量に含める日日光線による疾病を多く意味するものである。

即ち強き日光の直射光線を、而も何の覆もなく暴露されて受ける時に、殊に之が頭部を直射する時に多く冒される疾病である。

原因 原因としても、單に一口に云へば今述べた如く、直射日光の作用に過ぎぬ。然し單に日日光線としてでなく、矢張其の附近の周圍のコンデイションに非常に關係を有するものである。

元來日日光線は生物に缺く可らざるものである。然るに日日光線は單なる一種類の光線には非ずして、多種多様の波長を有する光線の集合である。従つて其の作用は各種の波長を有する光線に依つて、又周圍のコンデイションに依て非常に異なるものである。

日日光線は分量と強さと之を受ける個人の體質と、そして周圍の状態によつて、日光線は生体に害的作用を及ぼす場合と治療的作用を及ぼす時とがあるのである。即ち波長の長い光線よりは短い光線は、生物學的作用が強いものである。

殊に高山に於て著しい。それは高山に於ては、そして而も氷雪に包れた高山に於ては、其處の大氣が非常に清澄であつて、大氣の光線吸収力が非常に少く従つて短い波長の光線を多く含める強い純粹に近い光線を受ける事になり、又氷雪面にては同様波長の短い光線を反射する爲め其の効果が甚だ著しい理である。(高山のサナトリウムは之の理を加減して有効に利用して居る理である。)

症狀 輕度なものは、單に頭痛、不快、眩暈感位の氣持で輕快するものもある。又一程度の潜伏期を経て後、皮膚に紅

スキー滑走に於ける二要素に就て (承前)

岡 村 源 太 郎

スキー塗料及びスキー材

スキーカーヴを良好ならしめて好く滑るやうにするのは、スキー全体としての摩擦係数を成るべく少からしむることに外ならないが、更にスキーの底面はそれ自身に於て雪との摩擦係数が小でなければならぬ。此の目的の爲にスキー蠟その他の塗料が用ひられて居る。パラフィンがその最も代表的なもので古くより廣く使用せられて居るが、之は滑走用として用ひらるゝが、時には滑り過ぎるきらひがある。然し大抵の場合無いよりは極めて効多く、平地及び下降の滑走の要素を大いに必要とする場合に、スキー登山の頂上で塗蠟する事によつて充分パラフィンの効果を發揮せしめて居る。又殆ど滑走万能のジヤムブには滑り一方のパラフィンのやうなワックスがよい。

然しパラフィンと云へども雪との間には摩擦を有し居る關係上、或程度までの制動は可能である。この制動の工合がもつと好くなつて居るのが一般の所謂ワックスである。即ちワックスはパラフィン以外に色々の混合物を以て製造せられ、その混合物の種類多少によつて制動に對して効果が異つて居る。之はワックスのパラフィン或は他の蠟がパラフィンと殆ど同様な制動を保ちつゝ、一方にワックス中に含まれる油やゴムが制動を極めて豊がならしめて居るのである。それで下降の際にはワックスもパラフィンも殆ど同様に滑るけれども、登りの時はワックスを塗つた方が遙かに急に直登をする

事が出来る。

此の關係が最も著しくなつて居るのは所謂シユタイグワックスである。即ちシユタイグワックス（登り蠟）であるから登りに甚だ有効なのであるが更に降りも都合よく、制動、滑走に對して共に大きな助力を與へて居る。我國では一九二五年頃まではかゝる都合のよいワックスは輸入品専用で、未だ日本製品が市上に出なかつた程にシユタイグワックス塗法は割に新しい技術になつて居る。シユタイグワックスには雪質により色々の種類があるが、更に製造會社によりフィンダル、オーストバイ、プラトリー、ソーム或はエネテイス等の製品があつて、之等がそれ／＼使用法、塗法を異にして居る。

シユタイグワックスの發現は、スキー滑走に一新紀元を畫するに至るであらうと思ふ。ゲレンデラウフにも必要欠くべからざるものであると共に、デイスタンスレースには此の有効なる使用法が殆ど絶對的効果を齎す事が少くない。

猶ワックス以外にもスキーの塗料があつて、之もスキーの滑りに大きな影響を與へるが、ワックスの性質に比敵する好いものはない。後滑りするが降りに役に立たないと云ふものもある。

スキーの制動及び滑走を左右するのは上述の如くワックスであるが、更にスキー材そのものの性質も之等の要素を支配する事が少くない。他の材はあの材よりよく滑ると云ふ時に、よりよく滑るスキーは本來滑走の要素を豊かに持つて居るのである。而も此の滑る滑らないの二性質はワックスを塗る事によつて或程度まで變へる事が出来るが、それも程度問題であつて如何なるワックスもそのスキー材の有する性質を根底より自由にするには至らないのである。滑らない材に如何にパラフィンを厚く塗つても滑らない。或は同様なるワックスなりパラフィンを塗つても、或スキーは後滑りをし、或スキーは少しも後滑りをしない事が時々ある。

このスキー材の滑る滑らないの状態は私の經驗ではシユタイグワックスの場合の如く割合に後滑りせず而も他の本來好く滑るスキーと同様に好く滑る事もあるけれども、その滑走或は制動に作用する性質には幾分の差異があるやうであ

る。即ちワックスではその中に含まれる或成分が滑走を助け、他の或成分（例へばタール、ゴム）が制動を助けて居ると考へられるが、スキー材による滑、不滑はそのスキー底面の微細な構造或はスキーの型、材の弾力等に關係するらしい。

要するにスキーの滑りはスキー材とスキーワックスに基礎をおく、即ちスキーは *Ski mit Wachs oder Wachs mit Ski* の一つの滑走及び制動に働くものとなつて居る。今後スキー滑走の効果を充分ならしむるには、我々は此の兩者の關係を忽かにせにして到底その目的を達する事は出来ない。

雪質及び摩擦係數

スキーと雪との關係は滑走及び制動の性質に對しても驚くべき微妙さを藏して居る。概して滑らない雪と滑る雪とに分けて居る人が多く、従來はそうゆう分け方によつて雪の性質を云々して居る事が多かつた。然し雪質は滑走の性ばかりで論すべきものではない。ポップスレイの如きとは異つてスキー滑走には登行もある以上は雪質と制動の状態も重大なものである。

一般に餘り變化して居ない乾燥せる粉雪は、制動、滑走に都合好く、殆どワックス無しでも好く滑り樂に登る事が出来る。そして紛乾雪の適當に踏み固められた斜面は登り降りが最も工合よく進行する。然し粉雪は踏まれた雪より制動には好いが滑走は遙かに劣つて居る。猶風によつて變質せられた粉雪で非常に滑りの悪い雪があるが、之は制動には極めて有効であるが、滑走には絶對的に不良である。バラフィンを塗つたスキーでも平地で殆ど前に滑らない事がある。之は風の影響に依つて甚だしく雪とスキー（及びワックス）との間の摩擦係數が増加した爲であつて、特殊の積雪状態か或は雪の結晶が形成せられた爲であらうと思ふ。

濕雪はワックス無しのスキーには附着する性質を持つて居て、制動や滑走の状態を考へる餘地が殆どない。従つてワッ

クス無しのスキーを濕雪中で用ふるならば殆どスキーの用を爲さず、絶対に滑らない程である。但し水分を含むだ粒狀雪だけは相當の滑りを見せて居る。制動も可成工合が好い。

スキーにワックスを塗れば濕雪でもスキーは充分に滑走及び制動の性質を適當に保有するやうになる。そして温度が零度に近い程その性質は粉雪に近くて殆ど申分ないスキー滑走が出来る。然し之にはワックスの性質に注意する事が重要で、雪温或は氣温とワックスの性質との不一致は制動の性質を甚だ不良ならしめ易い。即ち普通廣く用ひて居るワックスは濕雪の時ひどく後滑りするのが普通である。然し滑りはワックスの種類に關せず何れも相當の滑走を得る事が出来る。此の事實は濕雪は滑り一方のスキー家には餘り苦痛とならないが、制制の力に俟つ所の多いグレデラウフ或は競走には後滑りし易くて甚だ當惑するのである。濕雪か乾雪に劣るのは此のワックスを塗らねば滑りの悪い事と、ワックスを塗れば一般に後滑りして困る事によるのである。そして温度が零度に進さかるに従つて雪の不良度が増すものとせられて居る。

雪は積雪後日光或は風の影響を受けて又は晝夜の氣温の變化により次第にその性質を變化する。従つて制動及び滑走の性質も之に依つて變化して來る。

粉乾雪は濕雪になれば前に述べたやうになる。

寒暖の差の甚しい時、或は濕雪はやがて粒狀雪になる。粒狀雪は日中の濕つて居る時は相當の水分を含むで居ても、濕粉雪程の障害はない。然し乾燥せる粒狀雪は更に滑走、制動が好都合である。ワックス無しであるならば乾粉雪の場合より上位にある、即ち滑走が粉雪に勝り制動も踏み固められた粉雪には殆ど劣る處がない。然し之等は精確に簡言する事は出来ない。之等の粒狀雪は主に春季に遭遇するものである爲に、粒狀雪も刻一刻その性質を變化する事が多く、夕方と朝とに依つてその相違が可成大きいものである。然し一般に朝の粒狀雪はシュテムメンに都合好く、夕刻近くの新しい粒狀雪には非常に好く滑る時期があるやうである。

此の他破れ易い表皮を有する場合、多量の水分を含む雪等もあるが勿論二つの性質共に不良である。概括すれば凍雪は最も滑走に優れ粉乾雪之に次ぎ濕雪は最下位にある。制動は粉乾雪及び變質せる或種の粉雪最上で、普通の粒狀雪之に次ぎ凍雪（午後に遭遇する新しい粒狀雪）は最も不良である。濕雪は殆どスキーの運行を許さぬ程度に不良である。然しワックスを塗つたスキーを用ふる時は、滑走は凍雪、普通の粒狀雪の順序で次が粉雪及び濕雪である。制動は粉雪、濕雪、粒狀雪、凍雪の順序である。然し注意すべき事は凍雪或は粒狀雪はスキーの底面よりワックスを削り落す欠點を有して居る爲に、ワックスが長持ちしない。従つてスキーミットワックスの場合は此處に述べた順序よりも一二段低いものと考へなければいけない。そして結局は（踏み固められたる）粉乾雪上をスキーミットワックスで滑走するが最も都合よい事になつて居る。デイスタンスレースの好記録はかゝる粉乾雪の場合に作られる。之に反し滑走一方であるジャムプの美事な飛躍距離は粉乾雪の場合のみならず、凍雪粒狀雪の時にも現はれ易い。

何故に乾雪は滑走のみならず制動にも好都合であるに反し、濕雪は制動が不充分であるかに就いては（ワックス使用の時）私は明確な説明を聞いて居ない。然し此の雪質もバラフィンが殆ど滑る分子のみを多く含むに反し、シユタイグワックスは滑らない分子をも含むと同様に、乾雪はグライテンの性質以外に好くスキー（ミットワックス）を制動する力を持つて居るが、濕雪は制動なる要素を豊かにする分子が非常に劣る爲と考へられる。又不完全に變質して凍雪に近づいた粉雪の場合には、その中に凍雪の分子を少しく含むで居る爲であらうが平地滑走が極めて速やかに樂にやれる事がある。之の中の凍雪がスキーを大いに滑らせ滑走を極度に助ける一方、制動に有力なる粉雪が確實に後滑りを防いで居る爲であらうと考へられる。

或は又かゝる問題を摩擦係数の大小で説明する事も出来る。即ち滑走の時は運動の摩擦係数の値が重要であつて、その値が小であれば小なる程滑走が最良である。次に制動の時は靜止摩擦係数が大であればスキーは強く制動せられる事になり、後滑りが非常に少くなる。即ち良好なる滑走及び制動を共に兩立せしむるのは、大なる靜止摩擦係数、小なる運動摩擦係

數である。

要するにスキー材、スキーワックス及び雪質の三者の關係に於て、スキーミットワックスが雪面と接觸する場合には、兩者の間の運動摩擦係數は成るべく小であり且つ靜止摩擦係數が大であるとよい。即ち濕雪或は凍雪の時は運動摩擦係數は乾雪と殆ど同様である。靜止摩擦係數が割合に小さいわけである。一般に物体は運動摩擦係數より靜止摩擦係數の方が大であるが、スキーに於ても此の性質が著しい程有利である。スキー滑走の根本的要素として摩擦係數が滑走、制動に深い關係を持つて居るのである。

要するにスキー滑走は可成り複雑した關係のもとに、スキー家の技術、スキー材の性質、雪及びワックスの支配を受けて居る。之等をその根本より攻究する事は多大の専門的智識を必要とするもので、而も餘り實際的價値は多く有して居ない然し一言その内容に就いて少しく顧みる事も全然益なき事ではないと考へ、以上の如く簡單に散漫のそしりあるをも顧みずに愚見を述べた次第である。

猶以上述べた直線的のスキー滑走以外に、スウィングを起す爲の技術的要素は一層の多數で且つその結合は複雑である之に就いては中野氏が山ミスキー第四年二六五頁及び北大スキー部記念出版に詳しく述べられてあるからそれを参考にせられん事をお奨めする。

スキーのワツクス

麻 生 武 治

猛練習の結果も如何に美しく優れた *Langlauf Technik* も競技者が正しくワツクスを塗つて出場しなければ勝敗の結果は水泡に歸してしまふとは *Devan 氏* の *Schneebeger 氏* 等も云つてをることあります。即登高には出来るだけ後滑を防ぎ平地及滑降に際しては可成輕快に迅速に滑る様ワツクスを用ふることあります。其爲に雪質に應じて適當なワツクスを用ひねばなりません。今日中歐獨逸瑞あたり *Rennläufer* の用ひてゐるワツクスの數は實に澤山あつて然かも個々各々が自身の經驗知識から案出した處方ともいふべきものを持つてゐるて容易には仲間友達にさへ教へない程彼等も苦心してゐるのであります。技術や練習法が發達し競技が白熱すればする程勝敗の分岐はかゝて競技者當日の心身の狀態並にワツクスにありと云つて過言ではない

と思ひます。聞けば *Norway* の連中は各自が鍋で蠟を煮て自己獨特のものを用ふとさへ云ひます。コースの地勢雪質狀況、コースの長短は直接ワツクス問題にかゝつてくることです。他に較ぶべき何物もない此美しきスキースポルトに志して日なほ淺い私ですが、昨冬の練習中用ひたものを書きたてゝ老婆心か身の程知らずな云草かもしれませむが、御參考迄に。Bjornstad のおやぢの曰く五百個とか六百個とか *Norway* のワツクスを日本へ送つた。と云ふから無論日本で *Rennläufer* 各位の手に入るこゝに存じます。

I 登 峠 -5°Celsius 以下 *Oeshby Mix* (ノールウヘー)

或ひは *Dunzinser* (獨逸製)

II 粉 雪 然し第 I より氣温高き場合、降る最中並に

直後幾分水氣を帯びてゐる *Oeshby Medium*

III 霧 潤 雪 *feucht* といつても II と異つて降つてから時

日のたつた *Firn Schnee* の場合

Oestby の *Klitta* 或は *Sohn* の *Universal*

IV *Harscht* の場合 *Oestby* の *Skare Smöning*.

V 降雪後時日がたつたが *Firn Schnee* や *Harscht* がある

場合 *Brattie für Weichschnee*.

以上至極簡單に書きました。Remmihüterにお勧めしたいのは何處の競技會へも輕便な寒暖計を持つて行くこと。其に昨冬獨逸の選手權大會で見受けたことですが、當日一着の *Bayern* の *Gustav miller* がレースの半途 *Wachs* を塗つてをつたこゝであります。競技當日二日前に降つた雪は一八一〇米突の *St. Christoph* と一三四〇米突の *St. Anton* では雪質に相違のあつたことは無論であり、當日快晴であつたに於て尙更其差は大きいかと思はれました。 *Mix* を塗つて出發した彼は途中雪が氷ついてきたので *Klitta* にでも塗りかへたかと想像されます。他の競技者が雪質の變化に悩む時臨機の處置としてたとへ脱ぎはきに分時の *Loose* があつても結果に於ては賢明な策かと思はれます。

一寸お便りにかへて。

因みに *Deutscher Ski Verband* は来る十二月五日より拾九日迄 1928 年 *Olympiade* の爲の練習會を *Böhmnen* の *Keilberg* に開かれます。集り一流は *Kurt Endler*, *Neuner* 兄弟 *Gustav Miller*, *Willy Dick* 等々と聞かれました。

世界の舞臺へ

君 一 生

去年の五月のアルルベルグの夏期スキー大會に出場して優秀なる成績をあげられたる吾が武・麻生君は愈々此二月國際スキー聯盟主催にかゝるスキー競技會に正式に日本スキー聯盟の承認を得て参加せらるゝことになつた。此大會は伊太利領南チロールの *Cortina d'Ampezzo* に於て開かるものである。氏は五〇軒の *Dei Stans* レースに参加さるゝ筈である。

尙又二月中旬にはスウイスのサンモリツツで行はれる五〇軒の *Dei Stans* にも其他彼地で行はれる大、小の競技會にも出場さるゝ由のお便りがあつた。

唯一の在歐日本スキー選手として、單獨で奮闘して居らるゝ兵に對して吾等は遙か母國から大いに後援したいものである。シユナイダーと云はず、ルーターなど、世界的に知られて居るスキーの權威者の間にあつて、思ふ存分、心ゆく練習を積んで居らるゝ氏の爲に、光榮の日を祈り吉報の到らまことを待つものである。之は私人の期待する處ではあるまい。恐らく全日本のスキー家の鶴首する處であるに相違ない。

直滑降の味ひ

なほみつ生

憧れの札幌に着いたのは大正八年の九月の始めだつた。

翌日からバットとボールを持つてグラウンドを走りまはつてゐた。學校の始まるまでには未だ一週間程ある。二三日後に寄宿舎にはいることが出来た。そのうちにノンビリした顔が集つて来るやうになつて、あつちこつちの部屋に入した、がこの時にスキーを見受けたのはホンの僅かだつた。尤も神戸にゐる時分から運動具屋の店先に飾られてゐるのを見て、スキー具と云ふものはどんなものか位は知つてゐたが、それ等は皆、今寄宿舎で見ただれよりも立派で上等の様に思はれた。併し今日の日材の木目がどうの、ペンドの弾力は、底面のカーブの鹽梅は、巾は、厚さは、長さは、重さは、バランスは等々……の事をスキー選擇の必要條件とする目からは、何れが優れてゐたか知る由も

ないが、兎に角數年の間に寮の殆んどの部屋に、下宿屋の入口に、そして小供のゐる家の玄關には、必ずスキーが見出される様になつたことは嬉しいことであり又當然のことの様に思はれる。同じ冬期のスポーツでありながら、スケートの發達がスキーのそれに平行しないのは、少くとも札幌では雪が余りに多すぎると、人工的設備が余りに貧弱すぎることの原因されるものとしなければならぬが、所謂スキー（術も製作も設備もすべてスキーに關することをふくむ）に長足の進歩を示さしめと云ふことには、不斷の努力が、吾等のスキー部に依つて、スキー部の創設以來なされて來たと云ふことを見逃すことは出来ない。そうしてこの努力が今日の吾國に於ける庭球、水泳が遂に世界のレヴェルに迄達せし如く、必ず近い將來に於て、吾國のスキ

―術を檜舞臺の北歐に迄持つて行き、覇を争はしむるに至るであらうこゝは想像に難くない。之は吾々のスキー部の最も誇とする所であつて、又部員の重大な使命、責任である。

* * * * *

愈々雪がやつて來た。寄宿舎の誰でもがやる林學講堂前の洗禮を朝の五時頃に受けた。二度目が千尺高地へ行つた但し雪のあるのは細い夏道だけ。よくもあんな奇險なこゝをやつたと思はれるが、尤もその時は二三間も滑れば聲を落すのだから間違ひはない。でも時計、メダル、財布の類はすつかりなくしてしまつた。そして歸りには川でスキーの泥を洗つた。三度目は所謂シルヴァースロープ、同行五人、當時の秀才の二人は後、病にとつかれて部から遠く離れてしまつたのはかへすがへすも惜しい。この日は水曜日だつた。勿論學校を休んでのことだから、歸室早々、夫々室長（今のスキーの諸名士）のお叱を受けたが、何かの拍子で自分だけはその難を逃れた。こんなことが度重なつて圖に乗つたと云ふわけでもないが、二年目の冬にはスキー部に對して全く申し譯のないことをしてしまつた。それは

第一學期の試験の二日目、机の前に坐ることがいやでいやでたまらなくなり「オイ行かうか」「行かう」と極く簡單な二言葉で、その日から青山に走つてしまつた。當時は前後の考へもなくホンの出來心だつたんだ。後で部長を始め諸先生、先輩に非常な御迷惑を懸け、自分も小さくなつてゐなければならぬ破目に陥つてしまつた。がそれ等の人々に對して未だに何の御挨拶もしないもので、この際紙上を拜借して古い失敗のお詫びと、御面道を見て下したお禮とを合せて書かせて戴きます。そして若い選手となるべき人達に大會に出る様な場合に、少くとも「彼の成績では」と先生の頭をひねらせないだけの平生の準備をお願いします

* * * * *

二月の十一日、加納さんにつれられて新米四人がガンビ平にキヤムピングに出かけた。當時のことは何かに一度書かれたやうに記憶するが、尤もその時は雪の中で夜をあかすことはどんなものだらう——又加納さんとしては後の冬の旅行のための足踏みだつたと思ふ——と云ふことを経験するために行つた。そこで大きな鍋や、毛布、マント等始めて持つ重いリュックに汗を流し、長い時間をかけて、穴

をほつて屋根はスキー、杖、木の枝、油紙、雪で造つて中にもぐり込んだ。夜の豚飯は實にうまかつた。好い氣持になつてノートラを吹きだしたが、一回が終らないうちに臀の方から冷たさが身にしみて、トランプ所の騒ではない。

臀の下に敷くべき何かの毛皮、或は芝の様なものに加納さんが氣付かなかつたんだから、自分達に分らう筈がない。体をよせ合ふやう、太股をこすやら、足指をひねるやら。

穴の外は零下十二三度、内は零度に下つたことはなかつた併し當時はあるだけの智識と材料で最善を盡したつもりだつたんだから笑はないでほしい。が翌朝は空が白むや否や何も食べないで手稻の頂ですべつて來た。「朝飯前だ」と云ふ言葉を本當に實行したわけだ。

* * * * *

合宿の名の附けられるものは何れによらず自分にとつては常に愉快なものでつた。大正八年に入學して十五年に卒業する迄、野球、陸上競技、スキーの三部で約三十回の合宿をした。そのうちスキーに屬するものは丁度二十回、青山不老閣の古狸になり、又琴似のアンチャンの好い友達にもなつた。恐らく合宿數の今迄のレコードだらうが、スキ

ーのみに關した合宿では、惡縁の友ケンセイ事廣田戸七郎には残念ながら一步を譲らなければならぬ。彼は來年卒業（大正十六年三月）迄には廿二、三回の合宿數になるだらうから。

讀者諸君の大部は、すでに合宿生活、或は選手生活をして、その愉快、責任、苦痛、榮ある勝利てなごの味なめて御存知のことゝ思はれらるゝに廻らぬ筆を運ばせて駄句をならべることとは止めておかう。

毎冬の合宿で一番困らされることは、夜になると人一倍の窮屈を感じしめられることだつた。原因は他でもない。自分の体が温たかだつたからだ。甘い物にたかる蟻と一諸で毎晩入れかはり立ちかはり、左右から自分の城廓に浸入して來る。尤もあの寒い部屋に首迄かければ足が出ると云ふ寢床だから。營養不良の徒のふるへるのも仕方のないことだが、大尉を發するK、手くせの悪いM、足くせの悪いR等は好い氣持にさせてもらひ乍ら、他人の安眠を妨害する全くけしからぬ奴等であつた。で一策を案じ蒲團部屋に退却したが、此處でも自分の高説を拜聽すべく希望者雲集その人達に頭腦を痛めること多大。三年間續いたが、三階

の部屋は藤江の死によつて閉鎖されたらしい。

自分が山に登るのは後で滑降の面白さに引きづられての

ことで、決して山に興味があつてのためではない。勿論登

行中に於いて、針葉樹の美さや景色の壮大さに心を動かさ

れないわけではないが、滑りがいいの山ときまつてゐる

山にはどうしても登る気にはなれない。(この意味で第一回

の昆布登山の様なつまらない思をしたことはなかつた)加

ふるに未知の場所しかも幾分でも危険のある時、例へば天

候、或は道のまよひ易い所に行く事は、常に恐怖が快味に

打ち勝つてしまつてアヅマシクなかつた。すべての運動競

技には夫々ある程度の危険は伴ふものであつて、ある意味

に於ては、その危険の程度に比例して愉快さを増すもの

であると云ふことを承知しながら、本當の登山又は一種の

冒険旅行と云ふものを敢行する気にはなれなかつた。之は

實際残念に思ふ次第だが、登山等云ふことは自分のスボ

ーツに對する心理の例外に置くべきものと考へてゐる。ス

キーのエツヂのホンの僅かしかかゝらない所で体か堅くな

る様な氣持がするし、ガスがおそつて來た時には何だか心

細くなる。だからニセコアンの肩でキツクターンする毎に

ダイヤのポイントの様な恰好をさせた足に微妙な震動を起

さしめ、一々御輿をすえた大食漢の〇氏には十分の同情を

よせることが出来る。

二月の始めだつたか、奥手稻行が發表されたので自分共

で新入部員三名が之に加はつた。何しろ山と名の付くやう

な所へ行くのは最初だつたし前記の様な恐怖心を持つてゐ

るものだから、例の富士山の模型のやうな山の下で一寸し

た冷い風のために、帽子の縁をおろしてしまつた。やがて

体が燃えて來る。目には泉がはいる。歩きながら縁を上げ

やうにして先輩にひやかされる。こつちは正直に前の人と

の間隔と云ふことが頭にこびり付いて遅れてはいけないと

思ふものだからあせる。それに進むべき道か直ぐ向に見え

てゐても、谷が入り込んでゐるために登高線を傳つて遠廻

りをしなければならぬので、この邊數丁は全く癪にさは

つたがどうにもならなかつた。けれ共、この日の最後の所

謂遙山ですつかり直滑降の病み付きになつた。その年三月

のヴァイスホルン、十三年の青山合宿の時のニセコアンの

直滑降はいつまでも忘れられないものだらう。加ふるに前者には四日間の旨、後者には藤江の死の間接の原因が附隨してゐる。全く十三年の合宿は天候に恵まれてゐた。第二日目、快晴、氣温は相當高かつたが、雪温は低かつた。即ち軍手さへも使はないでニセコの頂まで登り得た事と、雪が輕つた事が知れる。尙あの吹きさらしの鞍部が堅雪に新らしいのが二三寸積つてゐると云ふこの上もない良いコンデイションだつた。三分の一程すべつた時にガスが懸つた例の恐怖心はいつもの様にわいて來た。そして四邊が暗くなればなる程恐怖も強くなる。がやがてバツト太陽の光がさし、いやな奴は次の尾根を埋めてゐる。「第一班直滑降」自分はスキーの驚異の寫眞と同じ場面を上から享樂しながら最後にすべつた。首から舞ひ込む粉雪にも絶大の愉快さを感じた。又樺の林を縫ふ時、二三のギャップのためにジヤムプを余儀なくさせられたが、之等は何の邪魔をしなかつたばかりでなく却つて興味を増してくれた。一同は峯をかへり見あほいだ。コバンイタバキ、ヘソ、ケンチャン……の類だ。直ぐに翌日再び登つて一直線にやつつける相談がなりたつた。

第三日目 昨日にも劣らぬ快晴、但し雪は少し重くなつてゐた。この日ニセコの頂上にまで行つた班は四つか五つあつた。實に空前のにぎやかさだつた。一班一同は直滑降をやるべく準備をして一人一人とすべり出した。トツプは勿論ケンチャンに決つてゐる。大分ひどいコンヴェックスになつてゐるために途中がどれ程あるかはつきりわからなかつたが、その下は可なり廣く開け、ブツシユが一列にならび所々入口の様に間があつた。皆はそこで思ひ思ひにクリスチャニヤ、テレマータと豪壯な所をやつてゐる。秀はコンデイションが悪いと云つてボーゲンを書いておいた。一同は再びすべり出したので自分も頂上の雪をストックでおした。耳が鳴る。兎に角耳がすさまじく鳴り出した。恐れてゐたブツシユも通り越した。登のスプールが足にこたへる様になつて來た。誰だつたか二三人を追ひ抜いたのは知つてゐるが、はつきりと姿は見えなかつた。只仁丹の前を横ぎつた時に失敬と云つたのは覺えてゐる。豫定のテレスの下の水飲場に來てしばらくするとヘソがテレスをとばしてゐるのが見えた。自分が時計を持つてゐなかつたゆゑに正確な時間を知ることが出来ないが、コイサンの所要の

時間から考へて六分前後だと思はれる。實に痛快だつた。汽車で狩太の近所を通る度毎にニセコがなつかしく眺められる。が併しその夜の雑談は遂に藤江の不慮の災難の間接の原因をなしてしまつたのには違ひないが、この自分の滑

老 婆 心

スキー部の誰かが言ひ出した。

山黨、畑黨。

間もなく燕麥黨なんて言葉を使用し出した人があつた。

北大スキー部といふのは正に此三の總合体の様なものになつたやうであつた。

爲に主義や立場を極端に主張し出す人が中に表はれて來て、とう／＼まるでつまらない意地張り見たいなことを演ずる様になつて進む處まで進んで來た。

降に對して自分には大きな自信もあつたし、準備もあり無謀の冒險でもなかつたのだから、君の死の原因をなしたと云ふことは許して成佛してくれ。

T O S 生

だが、もう少し年をとつて、落つて考へて見たらどうかと俺は何時も考へて居た。

山を指す、山でなくちやいけない、自分の生活を山に見出すといふ主張、それは決して悪くはない。そして又此一向の氣持は競技本位に向ふ人にも、享樂本位のスキー家にもあり得べき共通なものであるまいか。少くともそれに従事して居る間は。

山へ行く人が、西洋の山岳でなくては殆んど必要でない

完成近きサツポロシヤンツエ

廣 田 生

第五回全日本スキー選手権大会及び今シーズンの北海道スキー選手権大会をひかへて、多事なる札幌のスキー界は今やシーズン前にして諸方面で非常な活気がたゞよふて居る。

正に完成せられんとする札幌シヤンツエについて些か記して見やう。

此シヤンツエは札幌郊外三角山麓に位置し、方位は北東になつて居る。

経費の大部分は札幌市が負擔したもので、約三千五百圓である。が最初入札當時には此市の定額を以て請負はんとする人は殆んどなく、多くの請負者は手を控へたのであつたが、義侠肌の村上乙吉氏は内外の事情と、そして市の懇請とをよく理解せられて、非常な犠牲をも省みず去る十二

月上旬之を引受けられ、直ちに工事に着手せられた。今や二旬に達せざるに已に工事は其半ばを終り、今月末には完成することになつて居る。完成の曉には又三角山のスキー場に此シヤンツエの偉容を圍んで多くのスキーランナーは此三角山のスキー場に吸収せらるゝことであらう。そして此シヤンツエの偉容は、半永久的に三角山を飾るものであり、同時に此シヤンツエの存在する限り、此の請負者村上氏の名譽も亦永く傳へられ残さるゝものであらう。

設計は我々仲間で立てたものである。アプローチは約六十五米、最傾斜部三三度あり。櫓の最高所は地上一〇米四〇程あり。アプローチの途中A、B二點にスタート點の設けあり。シヤンツエS點よりA點までの巾五米、AB間は四米の中になつて居る。

シャンツエの傾斜は三度、巾五米、長さ二米、高さ二米である。全くネガテイヴのシャンツエである。

着陸斜面は全長百米、着陸し得る最長點はシャンツエの端から五〇米はとることが出来ると思ふ。最傾斜部は約三〇度である。着陸斜面は殆んど自然の儘であり、僅かに左右の地ならしを行つたに過ぎない。着陸斜面の巾はシャンツエ端直下より斜面上下方へ約一二米の間は一〇米の巾でそれより下方は次第に扇形に開き最下方は四〇米の巾になつて居る。着陸斜面の北側に高さ五米の審判臺が一間四方設けられて居る。

蓋し此大觀よりして私は此新らしきサツボロシャンツエを現在日本に作られてある固定ジャムピングヒル中の最となすに躊躇せぬであらう。此ジャムピングヒルは必ずしも理想的とは申されぬが、先づ此規模を有するならば、外國の一流選手を招聘して指導を受ける爲の目的には、充分使用し得ると思はれる。人達は結果の成績を一日も知らうとして居るであらう。私は設計者の一人として、其結果が如何なるものであらうとも一人の責任者であつたことを記憶するであらう。優秀な記録の出る出来ないは一にジャムバア

の技にもよろうし、又ヒルの規模にもよろう。私は幸ひに此シャンツエに於て日本の一流ジャムバアの妙技、優れた記録とそして雄壯鮮かなる技を出来得べくんば今シーズンに於て拜見したいものである。(一一・二二〇)



彙報抄録

編輯後記

一九二七年ホルメンコーレンスキー競技會

會議は一九二六年の十二月二十七日オスロに於て開催。

競技會は三月一日―七日まで開催

競技内容は不詳である。

本會で取扱つた本邦に於ける唯一のスキージヤムピングの純粹の研究的文献であつた廣田君の著書は此シーズンに入つて初版は全く絶版になつた。たゞ極く僅か札幌の富貴堂運動店で持合せて居る相である。希望の方は至急申込まるゝが良いであらう。

寄贈圖書

AAR BOK (1926) Oslo ノールウエースキークラブ

Camping 十二月號

Japan Camp Club.

Skigheimnis No. 1.

神戸スキー俱樂部

聖上崩御遊ばさる、謹んで悼み奉る。

改元昭和の前途を祝福したり。

大正十五年を振り返つて見ると、つく／＼スキーが隆盛になつて來たと云ふ感を深くさせられる。今シーズンに這入つて産聲を擧げたスキー場だけでも可成ある。スキーの書籍も出れば、大家も増えた。スキーにしてもどん／＼立派なのが作られて來たし、値段も安くなつた。札幌で參拾錢出すと子供のスキーが一揃買える。六敷しいワツクスまで和製で作られた。その上大きなシャンツエまで出來上つた。

かくして前途は洋々たるものだ。大いに祝福すべし。

本號挿入の寫眞版の内秩父宮殿下の御寫眞は英國の有名な Arnold Thun 氏が端西へ殿下の御伴をしたときに撮されたものを同氏より贈られたるもの、又麻生君の寫眞は同氏が 1925 の春アルベルグに於ける全瑞西スキー大會の際 H. E. S. のテイスタンスレースに三等を得られたときの寫眞で、同氏のゴールに入る所をこれも有名な C. J. Tuttle 氏が撮影せられたものである。

先月號は又大層發行が遅れて申わけがない。これはどうしても我々が學生である故學業にいそしみます結果と見て頂きたい。今後は十分遅れることを注意して成だけ早く發行する様にとめるつもりである。(健生)

北海道帝國大學スキー部編纂

ス
キ
ー
術
階
梯

御希望の方にお願ひ致します。

改訂増補第三版

定價 金六十錢

札幌 山とスキーの會

GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!



其秀ナスキーの

優秀ナスキー其具用

小樽

梅屋運動具店



の店弊るあ評定るな秀優
具用ツ一ポスアタニイウ

市 幌 札

店 具 動 運 谷 小

條 一 南

青山温泉

北海の靈峰マツカリヌブリに
連亘するシリベシの山陵
山陵を飾るタンネンボイメと
ブルフェルシユネー
東洋のサンモリツツと
稱せらるる
理想的スキー地！

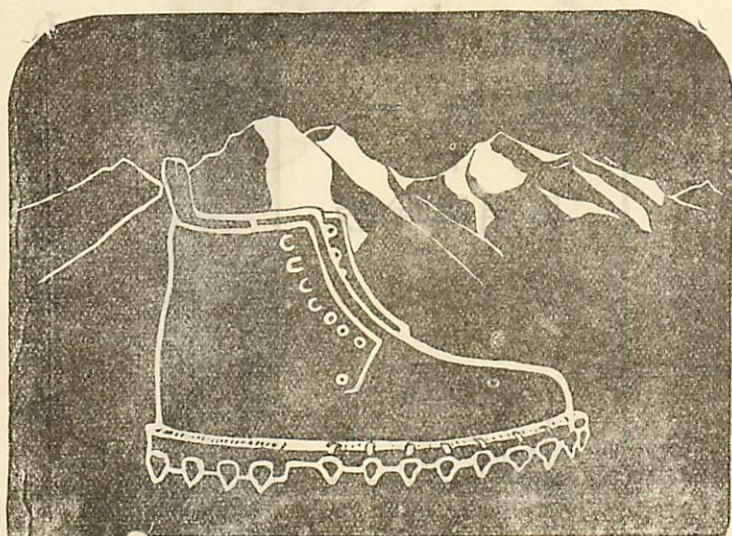
函館本線昆布驛より一里半

札幌より一時間五分

函館より一時間七分

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領



登山靴とスキ一靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一七二番

自信ある本年度製作品



SKI HEIL

スキー
ト

其用具全般

中野商店

スキー印がパ

第一
級製
スキー
大量

札幌



小田原市

六

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願いします又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願い致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和元年十二月廿八日印刷

昭和二年一月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 山 口 健 兒

印刷兼 發行者 廣 田 戸 七 郎

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北五條西十二丁目二番地

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 68, Januaro 1927. Sapporo, Japanujo.

美滿津のウキンター・スポーツ用具！



合名會社
美滿津商店

東京、本郷、赤門前

大正五年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和元年十二月廿八日印刷
昭和二年一月一日發行

山とスキー 第六十八號

定價參拾錢